



一関市大東町大原の下内野地区で9日、第22回「かじかの里」復活事業・石磨き大会が開かれた。地区民や小中学生、日本大生物資源科学部（神奈川県藤沢市）などの学生と一緒に砂鉄川で川底の石を磨き、カジカの生息に適した河川環境づくりに力を注いだ。

# カジカの里復活へ

## 大東・下内野 住民ら石磨き



カジカが生息できる河川環境づくりに向け砂鉄川で川底の石を磨く参加者

地区民と地元の大原小、大原中の一部児童生徒、農村体験などで滞在中の同学部生物環境工学科地域環境保全学研究室や、日本生物資源危機管理専門学校（茨城県古河市）の学生ら合わせて約110人が参加。同町大原字岩脇の岩脇バス停付近の河川敷から上流約700㍎の区間で、特製の古縄たわしを使って石に付いている有機物を取り除いた。

参加者は川底から石を拾い上げたり、ひっくり返したりしながらたわしで丁寧に磨いた。初めて体験した同専門学校2年の新井哲さん（20）は「足場が不安定でやりづらかったが、水の中にいるような生き物がいて楽しかった。自分たちがやったことで、（川に）生き物がもっと増えてくれればうれしい」と語っていた。

会場では、日本大の河野英一副学長らによる学習会、イワナのつかみ取り体験などを実施。交流も開かれ、地域や世代を超え触れ合いの輪を広げた。

大会は河川環境の保全や都市・農村交流などを

目的に、地元の下内野自治会と同研究室の主催で毎年開催している。同自治会の勝部欣一会長（69）は「一時はほとんど見られなくなったカジカも少しずつ増え、地域全体で環境を守る意識が出てきている。高齢化で継続は大変だが、毎年学生たちが来てくれるので、できるだけ長く続けたい」と意欲を見せていた。

## カジカのすむ川へ石磨き

一関・砂鉄川 参加者、効果を実感



古縄たわしを使い、砂鉄川の石を磨く参加者

一関市大東町の下内野自治会（勝部欣一会長）と日本大生物資源科学部地域環境保全学研究室による第22回石磨き大会は9日、同町「かじかの里復活事業」として両団体が長年続ける取り組み。同大の河野英一教授による学習会に続き、石に付いた有機物を流して酸素を送り込む石磨きに挑戦。地元の勝部さん（74）は「だんだんカジカが増え、地道な活動の効果が出ている」と実感を込めた。

緑のふるさと協力隊員として下内野地区で暮らす西田彩音さん（23）の家族も東京都八王子市から参加。両親の哲さん（60）、尚子さん（49）は「他人任せにせず、一人一人が率先して行動する姿に地域の力を感じる」と住民力を感じ取っていた。

水質調査やイワナのつかみ捕りも行われ、同大4年の中山寛紀さんは「たたら製鉄の炉作りなど貴重な体験がたぐさんできた」と喜んだ。

水質調査やイワナのつかみ捕りも行われ、同大4年の中山寛紀さんは「たたら製鉄の炉作りなど貴重な体験がたぐさんできた」と喜んだ。